

明治初期露文学翻訳論攷(四) 尾崎紅葉とロシア文学

加藤 百合

一、はじめに

尾崎紅葉の名は、貫一お宮の「金色夜叉」(明治三十年から三十五年に没するまで読売新聞に連載)の作者として有名である。日露戦争前は彼が幸田露伴とともに圧倒的多数の読者を引きつけて一世を風靡し、紅露時代と称された。また、硯友社の盟主として文壇に君臨し、自身が「青葡萄」という作品に描き出したように、泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋声など多くの弟子を育てかつ「封建的」徒党を組んだことでも知られる(1)。

流暢華麗な文章や、涙の見せ場をもつ構成(たとえば「熱海の海岸」の名場面・名科白の印象の強さ)もあるだろう、現在は文学的古さのみ強調されているようである(2)。紅葉は慶応三年生まれで二葉亭四迷よりも三歳、森鷗外よりも五歳年下であるが、「一世代古いような印象を受ける」とさえ言われている。

紅葉が門弟に対しては常に外国文学研究の不必要を説き、創作家に必要なのは実世間の観察であり、外国小説など読んでも役に立たない、と云っていた事が花袋の回想などでよく知られるため、紅葉

自身外国小説に無関心であったように思われる。が、事實は異なる。彼は明治の文学者のなかでもとりわけ外国文学の積極的な撰取者であった。

小説の趣向を得るために外国の文学作品の研究を怠らず、自ら翻案を行うこともあった。翻案による作品が(特に其の晩年に)多いことは周知の事実で、そのため、想が枯れた、小説の種が尽きた、「代作」、など言われるほどであった一面もある。

紅葉自身は常に外国小説を読んで頭を肥やしていた。就中ゾラの作を愛読して、……美妙の知識の領分はかなり広いようだったが、いつでも一つの領分の中を彷徨して同じ話ばかりしていた。紅葉はこれに反して段々と新しい領分を開拓して、合う度毎に必ず新しい本を読んでいて新しい話をした。(内田魯庵「思い出す人々」)

一九〇五年刊行の紅葉全集は、「個人全集としては異例のことに属する」とことわりつつ、共同執筆作品に丸一卷をあてている。紙

幅の関係上採録は共同執筆者一人当たり一篇のみを、としているが、こうした巻を設けたことは、特に紅葉の文学活動の性質を考える上で示唆に富む興味深い試みである。作品集、単行本、連載を含む成りの長編などを含めて八十三編の題が拾え、共同執筆作品の多さに改めて驚く(3)であろう。

翻訳の共同も、次のように、十指に余る。中にはかなりの長編も含まれている。

- 「題名」(原著者) 発表名義 発表雑誌
- 「名曲クレーツェロワ」(トルストイ) 小西増太郎・尾崎紅葉訳
- 「国民之友」明治28・8・23―12・7
- 「寒牡丹」(?) 尾崎徳太郎・長田忠一著 『読売新聞』明治33・1・1―5・10
- 「あけぼの」(デ・セスラーウイン) 瀬沼夏葉・尾崎紅葉訳 『文豪』明治34・4・10
- 「をさな心」(ドーデー) 瓶夢生・紅葉山人訳 『新小説』明治35・3・1
- 「投書家」「石」(ツルゲーネフ) 夏葉女史訳・紅葉山人閱 『新小説』明治35・3・1
- 「胸算用」(ドストエフスキー) 尾崎紅葉訳 『文芸界』明治35・3・15
- 「神の宴」「鉄臭」「火中の花」「三女相行」(ツルゲーネフ) 夏葉女史・紅葉山人共訳 『新小説』明治35・4・1
- 「女」(モーパッサン) 瓶夢生・紅葉山人共訳 『新小説』明治35・9・1
- 「アンナ カレーニナ」(トルストイ) 夏葉女史・紅葉山人訳 『文

藝』明治35・9・10―36・2・10

「草分衣」(レッシング) 紅葉山人訳 『二六新報』明治36・1・15

〔2・24〕

「非常報知」(?) 梅杏生・紅葉山人訳 『新小説』明治36・6

「月と人」(チェーホフ) 瀬沼夏葉・尾崎紅葉共訳 『新小説』明治

36・8・1

「写真帖」(チェーホフ) 夏葉女史・紅葉山人訳 『新小説』明治

36・10・1

「鐘楼守」上巻(ユゴー) 紅葉訳 早稲田大学出版部 明治36・

12・18

「鐘楼守」下巻(ユゴー) 紅葉訳 早稲田大学出版部 明治36・

12・18

紅葉には、独立しての(すなわち下訳者のいない原典からの)翻訳はほとんどないが、共同訳、校閲などさまざまな形で翻訳に関与した(4)。内田魯庵に、その最大最高の翻訳となった「罪と罰」の存在を(嵯峨之舎からの伝聞として)教えたのも、紅葉であった。

ロシア語を解さなかった紅葉のロシア文学翻訳における功績などは、従来余り問題にされてこなかった。しかし紅葉によって世に出た外国文学作品、なかでもロシア文学は、右述のとおり其の質量ともに無視できない重要なものがある(5)。さらに筆者は、紅葉が弟子の作の発表に名と場を貸したというだけでなく、文学作品の発見や選択に実際に力が大きく、訳文の校閲にも力を入れていると考えるものである。

本稿では、その、紅葉のロシア文学翻訳上の特異な役割についてみてみたい。

二、紅葉の文体と欧文脈

明治二十年代早々、すなわち初めて西洋流の高等教育を受け、又官費留学をはたした明治の青年（明治二十年に隕外森林太郎二十五歳、四迷長谷川辰之助二十三歳、漱石夏目金之助二十歳、紅葉尾崎徳太郎二十歳、美妙山田武太郎十九歳、逍遙坪内雄蔵二十九歳）が文壇に登場したときは、文壇挙げて言文一致の文体改革の機運が高かった。小説を書くこととしたときも、彼らは、当然、まず言文一致の「新」小説文体を模索した。

一足早く、「中流に相応しい」話し言葉と耳新しい「高尚な言葉」をちりばめた言文一致体で世に出たのは、紅葉にとっては幼なじみであり共に同人雑誌『我楽多文庫』を出していた山田美妙だった。

山田がわるくハイカラに外国の模倣ばかりをやり、評判のよいのにつれて、「都の花」に入り、「いらつめ」を発行し、極端な進歩派を振り廻したので、尾崎は山田以上に外国語も出来ながら、わざとそうしたバタ臭いものを却けてやれ三馬、やれ西鶴という風に保守派になって対抗して行くような形になり、・・」（花袋「近代の文章」）

と後に評されるが、当初の紅葉の反発は亦有名である。

文壇到る所ましまし。ありませんの獅子吼を聞いた。此時の自分の憂憤といふものは一方ならぬものであつた。天下に如此き気障なものはあるまいと唾棄してゐた破天連文章が具眼と見たる士にま

で歓迎されるとは何事だと、それからは一切言文一致の文章には手は触れなかつたのである。（紅葉。明治三十七年八月）。

しかし「豆腐と言文一致が大嫌ひなど、申候ひしはむかしの事、水に御流し被下度候」（明治二十三年十一月）と釈明しているほどで、紅葉も明治二十年代には美妙と共に多くの文体実験を行っている。美妙が、句読点の「創業者」の名を誇りに挙げた文章中にも、紅葉の名は、二葉亭などともに複数回あげられている。

明治二十二年の出世作「二人比丘尼色懺悔」では、個々の技巧の上でも、比喩や倒置法、体言止めなどのほか、

守真が氣を損じてはと。こはくながらいふ怨言。氣を損じてはと。斟酌するは「愛」怨言は「悪」水火のやうな「愛」と「悪」を。加減する処女ごころ。

のような抽象的で理屈っぽい文章、心中語を《 》でくくる、などしており、美妙に負けないバタ臭さである。

重要なのは、この作品全体にわたり、喋りの口調にも従来の戯作の文調にも頼らない文体を実験していることであろう(6)。

雅俗折衷おかしからず、言文一致このもしからずー我にも判断のならぬかかる一風異様の文体を創造せり（色懺悔「自序」）

「二種異様な文体」をつくつた、それについては句読点を頼りに読んで欲しい(7)(8)、と注文している。

紅葉の創り出した新しい文体で最も影響を与えたのは、紅葉が文のリズムを切断したところに置く結びとして、「二人女房」（明治二十四年八月から『都の花』六十四、九十七号に断続的に連載）執筆にあたって、「である」を工夫したところだろう。

言文一致体の文章も随分変遷して、初め山田美妙斎やなんぞが書いた時分には、実は僕大嫌で、全で女郎の文見たやうだと罵倒した事があつた。それから段々僕も言文一致を書くやうになつたが、第一考へたのは文章の結びだ。何々へです、何々へだ、何方も感服しないから、種々工風してへであるといふ事になつたのだがね。此のへであるでも随分苦労したのさ。つまりこのへであるといふ結びの言葉を、あまり目立たぬやう、読んでも耳立たぬやうにと、心がけて使つたのだが、それからといふものは、言文一致といふと誰も彼も、皆このへであるを使つたので、であるであるである……へであるが行毎にあるかと思ふと、新節のある前には、屹度へであるで結んだのさ。かうへであるの珠数繋ぎになられたには、困つちやつたね」（明治三十七年一月）

紅葉が（おそらくは漢文訓読か横浜言葉から）工夫した「である」という文末は、山田美妙の「ですます」調、二葉亭の「だ」調、紅葉の「である」調、といわれ定着した。

である調は、氏が創見で、これまで、誰も、創めたものはなかつた、これまでのへです、へた、へますは単に言の方から見る

と、難はないが、言文一致の目的からいふと、何となく平話のやうな気味があつて、完全とは、いへなかつた。すなはち、あまり言の方へ偏り過ぎて、今一層文に近づける必要があつたのである。（高松茅村『明治三十年太平洋出版社』）

ともかくにも西欧に倣おうと汲々とした鹿鳴館的欧化時代が過ぎると文壇にも反動からか元禄文学復興の保守的機運がさかんとなつた。一方、それまで文学界をリードしてきた二葉亭と坪内逍遙が相次いで小説の筆を折つた。鷗外も「小倉左遷」とよばれる地方転勤以降は軍籍にあつての言論活動するのに用心深くなり、帰国直後のような獅子吼は聞かれなくなつた。また一時は「紅葉が。注）太陽の前の月ほども光らなかつた」（内田魯庵）ともてはやされた山田美妙も、その余りにも奇をてらつた文体が飽きられ、田沢稲舟との醜聞などもあつて文壇での力を全く失つた。

尾崎紅葉は、そうしたなかで、絶筆となつた「金色夜叉」には、言文一致運動後書く人が絶えた「文章の力を示すつもり」で筆を執り、苦心に苦心を重ねて文章を彫琢して書き（明治三〇年から三五年に没するまで読売新聞に連載）、読者の渴仰を満たすことになる。しかし、同じ明治三十年に「二人女房」の改訂を行った際は、

其一斑を聞いたものは独り母親である。（中の三）

（初出…其の一斑を聞いたものは独り母親なり。）

母親からは之を僻見といへど。萬更僻見とも謂はれぬのである。

（中の五）

（初出…母親からはこれを僻見といへど、萬更僻見ともいはず、

其傾向はあり勝なり。」

ぐつと肝頭に徹へたのである。(中の五)

(初出…ぐつと肝頭に徹へて、どうしようかと途方に暮れてゐる。)

さも用あり気に恚う言つて見たのである。(中の五)

(初出…さも用あり気にかういつて見たものさ。)

右のように、「である」体はより徹底している。初版を出した後

・「二人女房」を都の花に出して見た。此は純然たる言文一致ではない。なりけりに未練のあるやうな、羞しながら俗語を遣ふやうな、煙たそうなものであったが、・(「紅葉山人の文章談」)

という思いが残った紅葉はこの改訂の際当時の自分の意図にそつて改めており、其の結果文語的要素は激減しているのである。

紅葉の文体選択は自覚的であつたことは忘れてはならない。

三、瀬沼夏葉と紅葉

日本に初めてチェーホフの作品を翻訳紹介したのが、明治三十四年から三十六年紅葉没時まで師事した夏葉こと瀬沼郁子(明治八、大正四。没年三十九歳)である。彼女は『新小説』『心の花』『文芸倶楽部』等に原書から初めてチェーホフの作品を訳出し、明治四十四年には『露国文豪チェーホフ傑作選』を出して大きな反響を得たほ

か、のち青鞥社の賛助員となり、『青鞥』に「叔父ワーニヤ」「桜の園」などを訳載した。明治年間に訳されたチェーホフの作品は五十編ほどであるが、夏葉は二十二編を訳し、重要な役割を果たしている。

日本政府が切支丹禁制の高札を撤去したのは明治六年のことであるが、ロシア正教会の宣教師ニコライは既に一八六一年(文久元年)に来日し、布教の許される日を期して、領事館のおかれた函館において日本語の習得と、布教という観点から見た日本研究に余念がなかつた(9)。早くも明治十年前後になると教勢は著しく伸長し、日本に主教区がもうけられ、六〇九九人の信徒と九六の教会を持つ大勢力になった(10)が、郁子の生家は初期の信徒であつた。

郁子は母の没後其の遺言によって(11)上京し正教女子神学校に入学し、九歳からの丸七年をニコライの膝下で過ごした。(しかし在学中はロシア語を知ることにはなかつた(12)。)

女子神学校を卒業し、そのまま母校で教鞭を執るようになった郁子がロシア文学に志した次第について、後に、師ニコライを偲ぶ文章の中で次のようにのべている。

教師となつてからは、割合に余暇があつたので、好める文学を研究した。此の時分、『経国美談』や、『谷間の姫百合』を読んだ。『警使者』(13)を読んで、露西亜に行つて見たいと思つた。『女学雑誌』と云ふ、巖本善次氏の発行された雑誌も愛読した。・其後、内田不知庵の『罪と罰』(14)が出たが、自分はそれを見て、是非露西亜文学を研究したいと云ふ望を起した。明治二十九年の頃は、

もう我が文壇でも、大分露西亜文学鼓吹の聲が高まって、トルストイ、ツルゲーネフ、ドストエフスキイの名は知れ渡った。其中にツルゲーネフの『片恋』(15)が出た。自分は其れを読み終ったとき、もうどうしても露西亜文学を研究したい念慮が抑へ切れず、・・・主教は始終を聞き終って、優しい冷笑を顔に泛べられ、自身図書館へ行って、露西亜語の「アズブカ」(ロシア語のアルファベット。注)の本を取り出して、自分に与へた。自分は其日から、或る親切な教師に就いて、露語を学び初めたので。(瀬沼夏葉「師の恩」『女子文壇』第四年第四号、明治四十一年三月)

この時からロシア語を教えた瀬沼格三郎がのち郁子の夫となった。(明治三十一年結婚)

尾崎紅葉には、瀬沼格三郎の方から近づいたようだ。おそらくは内室の文学指導を依頼しに刺を通じたものと思われる。

この頃郁子は一男一女をあげ、教会活動から退くと共に、専ら家でロシア語の勉強に余念がなかつたと伝えられる。

彼女の目を露西亜文学に開いた二葉亭も、そして魯庵(16)もすでに文壇にいなかった。一方名文の創作家としてさくさくたる名声を欲しいままにしていた紅葉は、また、其の指導と庇護を求めて周囲に集まってくる若い文学志望者の面倒見のいい親分肌なところでも知られていた。しかも、明治二十八年には、神学校出の小西増太郎と共に「クロイツェル・ソナタ」(名曲クロイツェル)を『国民之友』に発表している。妻のロシア語の師であった格三郎が文章の師として選んだ理由は十分にあつたのである。

当時紅葉は「金色夜叉」の執筆をはじめており、持病の胃病が悪

化するなか骨身を削る苦勞を重ねている最中で、未知の格三郎には面会せず名刺を受けただけのようであるが、注意深く名刺を日誌にメモしており、程なく夏葉自身が原稿を持って訪問、入門を果たした。(年表参照)

此の数年來本年の如く來客の紛々たるは稀に、又、入門を乞ふ者の陸続たるは何の故かと驚かるるばかりにて一々謝絶いたし候へども、ニコライ神学校長瀬沼氏の内室郁子と申す婦人のみを許し申候(明治三四年三月、ドイツの巖谷小波あての紅葉書簡。『近代文学研究叢書』第一五卷287ページ)

紅葉は、瀬沼郁子を優遇したように見える。特に葉の字をわけ、夏葉という号を与へた。

ロシア文学に興味を持っていた紅葉は、明治三十五年「胸算用」(原作ドストエフスキ「ヨルカと結婚」)を訳出しているがその際本文の前に「紅葉識」の文を添え、

・・・予近ごろ正教神学校長瀬沼格三郎氏と相識あひしるの故を以て、特に氏を勞して、其の正訳を得たり。・・・

と断っている。紅葉が、瀬沼格三郎にロシア語からの下訳を依頼してドストエフスキに取り組み、そのことで質疑に向向していたことは日誌にもみえる(17)。紅葉はロシアの神学校への留学経験も持つ格三郎をロシア語の作品を訳す頼りとした一方、九歳年下の夏葉に関して飽くまで文章の師として接している。

紅葉山人・夏葉女史の連名でツルゲーネフの小品が明治三十五年の『新小説』にあらわれた。(注。前節参照。) まずツルゲーネフの、『散文詩』から作品が選ばれたことには、ツルゲーネフが二葉亭(明治二十年『獵人日記』より「あひびき」。短篇「めぐりあひ」。明治二十九年「片恋」。その他「夢がたり」「うき草(ルージン)」「猶太人」「くされ縁」)、森鷗外(明治二十三年『散文詩』より「馬鹿な男」)(18)、上田敏、宮崎湖処子その他によって日本に最も早く劇的に紹介された露西亜作家だったことがあるが、特に掌編の集まりである散文詩を好んだのは紅葉の好みだったと思われる。

それについては明治三十四年にロシア人が書いた紅葉の談話があり、紅葉の文芸上の趣味がよく現れているので次ぎに引用することにしよう。紅葉がロシア人を目の前にした機会を捕らえての好奇心の噴出がめざましく感じられる。

・私は露西亜人と語る機を得て甚だ喜びます。氏は言ひ始めた。是は私には初発(はじめて)です、私は露西亜の文学を甚だ面白く感じてゐます、然し惜しい事には露語を知りませんが、露西亜の作家の或物は読みました。例へばツルゲエネフを読みました、其散文詩は最も感動を与へました、あれを悉く日本語に訳したいと思ひます。・我々はトルストイが今コメジャを書いてゐると云ふ事を聞きました、読みたいものです、日本の芝居に訳して見たいものです。

貴方が若し之を私に送つて下さつたなら、非常に有り難いのですが。

今貴国で新進の文学者中では誰が一番に評判ですか。ゴリキイ

ですか、此人は何者です。どういふ者を書いてゐるのです?・氏が絶間なく問題を掛るので、予は一々其に対して答弁する道もない位であつた。・(「紅葉山人を訪ふ」ヴィソオキフ、『俳藪』寅7号明治35年8月1日(19))

また、他の機会にも紅葉は「散文詩」への注目を語っている。

露西亜のものもいろいろ読んだ。ドストエフスキイも読んだが、僕はツルゲネフの書き方が好だ。短篇といふよりは寧ろ小篇ともいふべきものだが、簡潔で、文章が巧い。上田敏君は『散文詩』といふ名で、『みをつくし』に幾つか書いて居るが、実に散文の詩だね。・僕はこのツルゲネフのものを二つ三つ訳したが、これに習つて創作もして見たいと思ふ。二十行から三十行、そりや書けるものなら随分十行位の中に納めても可(いい)い。・(山岸荷葉「故紅葉大人断片」『新小説』明治37・1 1。紅葉没後、生前の口吻に似せて書かれたもの。)

しかしロシア文学翻訳史上の紅葉、夏葉の功績は、チェーホフを日本に根づかせたことであろう。

チェーホフに対する同時代評価は、日露戦争以前の段階では本国でも日本でも決して高くない。二葉亭も、次のように冷淡な口吻であつた。

日本ではゴルキイだとかチエホフだとか近頃のまだ真の価値の好く定まつて居ない人を盛んに紹介して置いて、此人(ゴンチャ

ロフのこと。注）を紹介しないと云ふ事は無いと思ふ（二葉亭「露西亜文学談」明治三九年）

それには理由がある。トルストイやその他の貴族作家たちと異なり生活のために書かざるを得なかった⁽²⁰⁾チェーホフは、職業的な小説作家としてスタートし、売るために小才の利いた小話を量産した⁽²¹⁾。その頃は、「脾臓のない男」「ユリシーズ」「アントーシヤ、チェホント」などと署名していた。しかし二十六歳のとき、文壇の長老グリゴローヴィチから熱誠を込めた書簡を受け取り、その中の、

・貴方には真の才能がある・急いで書くのはおやめなさい。貴方の経済的状況は知りませんが、困窮しているのなら、かつて私達がそうしたように飢えなさい。・

という思い切った忠告に従って作家を天職と考えるようになり、本質的にその作風を変えた。そして、初めてチェーホフという本名で書き始めたのである。「桜の園」が初演されたのは千九百四年⁽²²⁾、明治三十七年あたり、二葉亭は既に文芸の筆を折っている。日本でチェーホフの作品について真面目に考究されるのは日露戦争後くらいからということになる。

紅葉は、チェーホフを夏葉の紹介で早く知った。チェーホフの全集は、ニコライの図書館或いは瀬沼家にロシアから寄贈されたものらしい。その模様を夏葉が紅葉没後、師を追慕しつつ書いている。

わが師紅葉山人未だ世に在す時、一日われチェホフの短篇、

「月と人」、「写真帖」をものして、これを師の前に正を乞ふ。師はこれを読み終り、感嘆措く能はぬさまに、微笑みて曰く、余は初めて、チェホフの作を見たり。其着想の如何に面白き、われも亦今常に此の如く、不自然ならぬ人生に於て、ユーモルを見ること、此の如き所のものを創作せんことを希へり。この文章の中取分けて余が気に入りは、「写真帖」。彼の「父様記念碑！」のあたりの調子よさは、と。

チェーホフは、紅葉の気に入った。

紅葉はロシア文学の「血の滴るピフテキのようにコツテリとシツコイ」感じは好かなかった（また、魯庵によれば、「ジメくくして陰気だ」とも言っていた）ぶん、初期のチェホントのユウモアを評価した。

「月と人」「写真帖」は、それぞれ『新小説』明治三六年八月号と十月号に夏葉・紅葉共訳の形で発表された。左はその訳文の一部である。

さる避暑地の停車場のプラトフホオムを徜徉してゐる新婚の若夫婦、男は女の腰を擁へて、女は男に犇と寄り添うて、今を盛と嬉し樂しの其の風情を、雲の絶間から月が不興気に覗いてゐる。

（「月と人」冒頭）

「爹様、記念碑よ！御覧！」

ジムイホフは見ると笑出して、頭を左右に捍つて感心した。其余に彼はコオリアの頬を接吻して、

「こりや好う出来た！母さまの所へ持つて行つてみせな。」（「写真帖」末尾）

ここで、紅葉が弟子の翻訳にどのくらい参加したか、紅葉のイニシヤチヴはどのくらいのものと考えたらよいのかみてみよう。

江見水蔭の「紅葉と代作」⁽²³⁾には、泉鏡花、田山花袋、松居松葉⁽²⁴⁾などが翻訳ものを紅葉のもとに持ち込み、わずかの稿料をもらっていたこと、然し凝り性の紅葉は、其の原書を一通り見て、訳文と引き合わせるだけの用意は欠かさなかったこと、が微妙な筆遣いで書かれている。夏葉の「写真帖」をめぐっては、『紅葉書簡抄』⁽²⁵⁾に

(一) 開明の二字意分明ナラズ

(二) 天才と勤労と社会的自覚との舞台

コレモ不明也猶又社会的自覚トハ如何ナル意ニヤ

(三) 職務の祝とイフハ満期祝ノ意カ又ハ多年在勤ノ祝カ又カ

ウイフ祝が特ニアルノデナクココニノミ用井ラレシナル

カ（以下略）

など疑義が挙げられ「至急御返事被下度候」と括った書簡が残っており、同日の日記に「写真帖」に筆を加えていることが書かれている。

紅葉の絶筆となったのは「金色夜叉」だけではない。

「鐘楼守」と「アンナカレーニナ」の二つの翻訳作品が、未完のまま残されたが、紅葉はそれら翻訳についても創作と同様完結に執

着して文字どおり死力を尽くしていた。これらの翻訳にとりかかった頃紅葉は既に不治の病に冒されて、体力的に紅葉の筆は幾らも加わっていないはずとも今日言われているが、最晩年の紅葉の翻訳に対する姿勢は明らかである。

「鐘楼守」（ノオトル ダラム ドバリ）は、ユゴー原作のフランス文学であるが、まずこれについて想起しよう。並行して進行した「アンナカレーニナ」も同様の軌跡を辿ったと思われるからである。発表の名義は紅葉独りであるが、長田秋涛との共訳であり、紅葉の手飼いの徳田秋声も下訳として辞書首っ引き（英訳本片手に）で手伝ったことは当時から知られていた。

秋涛が書いた下巻の「鐘楼守序」によれば、紅葉はある日「卒然余に語て曰、現今文界の形勢索莫として甚だ称するに足るべきものなし、今泰西文豪著す所の一大雄篇を翻訳してこれを社会に紹介せんとす、敢えて兄の説を聴かん。」と大きな意気込みで翻訳にとりかかったという。フランス語に堪能だった秋涛が原作から直接訳したものと思われるが、紅葉は英訳本⁽²⁶⁾を手に入れて自らも「原文」にあたりながら筆を入れて深更に及び、又明け方まで机に向かうこともしばしばであった。また日記に覚えとして「秋涛氏来たり、伊藤十字楼子本日結婚の旨を告ぐ。子は鐘楼守の翻訳の助手也。」と書いている。これによっても、翻訳の主体は飽くまで紅葉にあったことがわかるのである。

刊行の折坪内逍遥は「はしがき」を寄せて、

・われはいまはまでも筆とりぬれば思ひ遺すこと無し」といへるその経営の跡しるきこの訳筆こそは、あはれ・病革るにお

よびては・・隠然として一種の病床日誌につきて日々病勢の進みゆく様を読むが如き心地する、いと痛わし・・

と言つた。逍遙、魯庵など、紅葉の友人達は紅葉が乏しい余力を翻訳にふりしほるさまを見ていられなかつたようである(27)が紅葉は臨終のまぎわまで自身筆を置かなかつた。

・亡友紅葉山人尾崎徳太郎君永眠に先づ数刻、余を枕頭に招き、悄然として謂ひて曰く、

吾命今宵に迫る、鐘楼守の刻成を見るに由なし、遺憾にたへず、冀くは後事を挙げて卿に囑するを得んか。

当時余が胸中における万斛の悲痛自から禁せず、點頭して諾意を表するのみ。斯くの如くにして文豪終に逝き、鐘楼守の訳篇其の遺物として、今なほ依然余の卓上に存するを見る、(前出「鐘楼守序」)

同書は紅葉没後約一カ月半後に早稲田大学文学叢書の一つとして早稲田大学出版部から上下二巻、七百ページを超えるものとして刊行された。

夏葉との共訳をしたトルストイの大作「アンナカレニナ」(28)は紅葉自身が主宰する『文藝』の一―六号に連載された。

紅葉・夏葉訳「アンナカレニナ」冒頭を、現代の訳と比較してここに挙げる。夏葉・紅葉訳が、既に綿密にして優れたモダンなものであつた事が見て取れよう。

和合した家庭の状は、いづれも似通うた者であるが、然あらぬ家庭に於ては、其の不幸の躰が皆各差う。

アブロンスキイの家内の乱脈は甚いもので。主が内の仏蘭西人の保母に手を出した事が夫人に知れて、忽ち一場の悶着が起つて、然云う夫と一所に暮すのはどうでも不承知、と言出して夫人が肯かぬ。其の紛擾が引き続き三日にもなるので、下々の召使までが皆心を痛めて居る、而して誰しも、而した夫婦の間柄では、一所に居たからとて何の効もない、却つて木賃宿に泊り合わせた客達の方が、恁云う家族や召使よりは、はるかに関係が密であらうと思うのであつた。

(幸福な家庭はどれもみな似たりよつたりだが、不幸は家庭は不幸のさまがひとつひとつ違つてゐる。

オブロンスキイ家では何もかもめちやくちやになつてしまつた。夫が以前家にいた家庭教師のフランス婦人と関係してゐたことを知つた妻が、こうなつたらもう同じ屋根の下では暮せないと夫に向かって宣言したのだ。この状態はもう三日も続いていて、当の夫婦も家族一同も召使達も、苦しいほどそれを意識してゐた。家族一同や召使達は、自分たちの共同生活は無意味であり、どんな宿屋にたまたま泊り合わせた連中でも、自分たちオブロンスキイ家の家族や使用人に比べればまだしも互につながりがあると感じてゐた。(木村彰一訳)

此の雑誌はおそらくはアンナカレニナの発表を急ぐ心から紅葉が創刊した(29)もので、創刊号から終巻である第六号まで大部分のページを同作の翻訳が占めた。夏葉が訳したものに紅葉が筆を入れるの

であったが、主導は紅葉であったろうことは、紅葉の病氣、死去によつてたちまち中断したことによつてもわかる。

紅葉の弟子小栗風葉は、佐佐木信綱宛の書簡中、

・右は決して中絶には無之、実は紅葉先生御死去の砌、小生御委託相受け、瀬沼氏も其後引続き翻訳に従事致され居り候。

と述べている⁽³⁰⁾。風葉は紅葉没後「金色夜叉」を書き継いで完結させたことで知られる。紅葉は、「アンナカレニナ」も彼に後事を託したのである。しかし、結局「アンナカレニナ」は中絶した。・夏葉には長編にすぎたのだろうか。

夏葉は師の死後独り立ちし、もっぱらチェエホフの翻訳を続けた。明治四十一年にはそれまでのチェエホフ翻訳作品を網羅して『露国文豪チエホフ傑作集』（明治四十一年十月獅子吼書房刊。収録十三編。「六号室」「里の女」「余計者」「人影」「月と人」「写真帖」「たはむれ」「叱ッ」「艶福男」「村役場」「失策」「官吏の死」「をんな」ドストエフスキー作の「薄命」。）として上梓した⁽³¹⁾。

夏葉自身にとってチェエホフが最も趣味に合い、愛読する作家であったことは間違いないにしても、チェエホフに深甚な影響や感動をおぼえたから訳に取り組んだと一概には言えない。彼女のチェエホフ評を見る限りは軽いユーモアを専ら評価する点、師紅葉と共通している。外国語学校退学という挫折の後「土蔵の中で呻吟して」数年を暮らした二葉亭、また富士山麓で「罪と罰」を耽読し、一種の回心をおこした魯庵のような個人的文学体験は夏葉は持っていない。初

期の軽い上品な読み物であるチェエホフの短編は家庭にあつて少しづつ訳筆を継ぐ夏葉には適当していたであろう。

夏葉はチェエホフについて何回か書いている。

・日頃愛読して居るのは無論チエホフの作物なので、チエホフの物は読んだもの一つでも、これは詰らぬと思ふたものはない位、何んとも云へぬ、軽い、調子の好い、自然のユーモルの筆つてゐる棄てがたき妙味鞠すべきものがあるので、昼食後一寸椅子に倚つたとき、又避暑地などに携へて行く時は此上もなき好同伴。（愛読せ　る外国の小説戯曲）『趣味』第三卷第一号、明治四一年一月）

例へば死後の問題などでも余ほど迷つてゐるらしいで御座いますね。つまり私は、今少しチエホフの思想上に信仰の念が加はつたらばと思ふので御座いますよ。：チエホフのものは、大した努力もなくて楽に読めるのですが、それだけチエホフには、ドストエフスキー程心理の解剖が深くないのぢやないかと思はれるので、今一と息だといふ感じが、チエホフの作物を読む際には始終起ります。（チエホフの短篇と脚本）『文章世界』第五卷第四号、明治四三年二月）

右の引用文は、夏葉自身がチェエホフについて語つたものであるが、『露国文豪チエホフ傑作集』の発刊後のものであり、特に集中に「六号室」が収められていたことを考えると、訳者の暢気な感想には逆に驚く。むしろ、反響を寄せたうち『中央公論』（第二十三卷

第十二号、明治41・12)子が、

・読んで見て面白い処もある代り、又我等の胸にシツキリと合はぬ所もあるやうなるが、巻頭の『六号室』だけは其心理描写の精細、全体の陰鬱なる空氣、誠に文壇の珍とすべく、初めの部分は不自然に感せられ、若くは余りに胸にひびかぬ心地するが、読みゆく中いつしか作中に引つけられて、しきりに胸を圧せらるるを覚ゆるは確かに天才の筆といふべし。・白鳥氏若し露国に生れしならば、必ずチエホフの如き作家となりしならんと思はる。・

と解しているあたりが先見的な評論であろう。のち自然主義の作家たちにチエホフの後期の諸作品、特に「六号室」は深刻な影響を与えたのである。

夏葉の場合、此の、チエホフ初期則ちチエホフ時代にできあがつたチエホフ観が、チエホフ没後、後期の作品も出そろった後までも変わらなかつたところが逆に注目される。夏葉は紅葉没後、新しい作家を開拓してないのである。そしてツルゲーネフ、チエーホフ、ドストエフスキー等、師が生前鼓吹した作家の小品を次々訳していった。夏葉は、初期のものから晩年の作まで同一の作者をねばり強く訳し、また、評論や随筆も主としてそれらの作家に集中して、それが彼女の翻訳活動の特徴になつていふと思われが、其の理由の一端は、紅葉の主導で翻訳を始めたところにあるのではないかと私は考える。(32)

『十千万堂日録』から。瀬沼格三郎及び夏葉、ロシア文学翻訳についての部分抜粋

明治三十四年一月三十日 正午起。・神学士瀬沼格三郎氏(正教神学校長駿河台北甲賀町十二(割り注で)・来る、不遇(あはず)・

二月十八日 正午起。快晴。瀬沼格三郎氏来りて、其の内室の入門を請ふ。・

二月二十八日・一時過瀬沼郁子来訪、原稿二種持参。思案子、秋目、可山子、相踵いで来る。・

三月一日・瀬沼郁子氏ビスケット一缶持参。・

三月八日・文して瀬沼郁子(桔梗女史)に夏葉の号を与ふ。山形氏の人佐藤繁蔵に流葉、北田尊女に薄氷の号を与へしに皆死没せり。讖を作すとも云ふべきか。然るに独り田中涼葉は如何。・

三月十五日・十時、夏葉女史来る。・

三月二十五日・十時、夏葉女史来訪の為に起され、十二時迄文章を講ず。・

四月七日・此日夏葉女史より明日可被参や否や問ひ越す。其文の末に、此状の文字も乞正と記せり。奇特の志可感也。かかる人は未だ有らざりし。

五月一日・不在中夏葉女史ウエイフア一函、卵一折持参、問病。・

六月一日・それより駿河台正教神学校に瀬沼氏を訪ふ。酒肴出づ。・

七月五日・午後夏葉女史蒸乳器持参、長談して帰る。・

九月十八日・午前夏葉より来状にて露国要塞砲兵中尉ビイソオキフ氏同に面会を乞ふ旨を告ぐ、乃ち午後二三時頃来れの返電す。・午後瀬沼氏同道にて来訪、五時位まで文学談あり。・明日長崎に帰る由也。

十月六日・一時過夏葉来る、ロシア煙草紙巻自詰一箱贈らる。アンナカレニイナ六持参。嗟峨のや子ニコライにて洗礼を受け、伝道学校に入る旨懇

望して已まず(身を献して感謝の意を表せんとすると言ふに在り)となん。
(ここまでの項は、中村喜和「瀬沼夏葉其の生涯と業績」に再録されたものと重複するものがほとんどである。注)

十一月二十七日・午後一時夏葉女史アンナカレニイナ原稿七八九ノ三冊持参。風月堂栗まんじう一折。夏葉帰るの際春陽堂来れり。

十二月二十一日・午前夏葉女史歳暮に来るカル、ス一罐及其の手飼チヤボ一番。・午後春陽堂来る。・日暮チヤボを緊む。・

明治三十五年一月二十日・不在中夏葉女史ビイソキフより予に贈れる魯西亜短篇数種持参又岡田氏来訪。・

一月二十六日・午後一時夏葉来訪此日一時より藻社発会あり。・
二月一日・午前四時迄「胸算用」を草す。・

二月十三日・夜文芸界小説「胸算用」を改刪して三時二至る。・
二月十七日・午後瀬沼氏を訪ふ。・瀬沼氏往訪の主意はドストイエフスキイ胸算用訳文の質疑ありて也。・

三月二十五日・午後三時頃夏葉女史来訪手飼の卵一箱持参。・
三月二十八日・新小説出版。夏葉訳のツルゲニフ小品二則出でたり。・

三月三日・食後一睡午後二時に至りて夏葉女史来訪。日暮迄語りて帰れり。・

三月九日・二時鎌馬に搭じて春陽堂にツルゲエネフ小品の統稿を置き傘と下駄とを借りて又馬鏡にて上野に趣き。・

四月二十七日 午後藤枝を伴ひ風葉を訪ひ、夏葉来訪の使を受けて帰る。・

四月二十三日・午後夏葉女史二十(漢字)六日復活祭ノ迎に来る。・
四月二十六日・夜食後ニコライ聖堂の復活祭に趣く式は0時より三時に

至る。・三時頃瀬沼氏宅に帰りてロオストビイフとハムと赤玉子と菓子にて紅茶を啜り翌八時前帰宅(雨)。

五月二十三日・帰れば夏葉女史来り子が病を案じ其のれる鍼治の妙手を薦め且予が自愛の足らざるを諫めん為に妊娠中を推して来れる也(カレニイナ訳十二)を自参す。其の帰る上燈に近し。・

六月二日・午後二時前車を駆りて瀬沼氏に趣く。ジュールサレムの聖堂の大破跡に委棄せるモザイク用の蠟石の破片一枚を印材として贈らる。四時半歩して帰る。・瀬沼氏より帰る途上左肋下部に微痛を感じ晩食後迄不快也。十句行き十二枚今朝始て瀬沼氏所贈のトラペゾンを試む。・

六月三日・二時車にて瀬沼氏に趣く昨及一昨日胃痛は鍼治後時を経ずして徒歩帰宅の運動過激なるに因るとの注意有り治療後五時半迄話し車にて帰宅。・

明治三十六年四月十四日・夏葉女史来訪、家飼チヤボ玉子十箇と磯部せんべい持参(神経衰弱にて故郷高崎に十二日間ほど旅して一昨日帰りしと也)

六月十四日 夏葉女史来ル。アンナカレニイナ(十四)持参。
風月ビスケット(一罐)午砲を聞きて帰る。

六月十七日・瀬沼夏葉より来廿日東京座見物ことわり。
(中略)夏葉より同(封書のこと。注)

六月十八日・夏葉女史よりチエーホフ短篇輸送。
六月二十一日・次ぎに春陽堂より使にて煙霞療養訂正料及チエーホフ短篇稿料として七十円来る。・夏葉女史女子を率て来る。療治しつつ相談す。・

六月二十六日・午後夏葉女史より写真帖訳本郵着。・夏葉所訳の「写真帖」に加筆す。・

七月二日・チエホフ写真帖の訳を訂正す。
後疲れて仮寝す。・

(以上加藤抄)

四、紅葉の翻訳史上の位置

紅葉は外国文学の教養を隠し、美妙は英文学の華やかな衣装をまとい、文壇に登場した。然し美妙が遺した翻案や翻訳は質量ともに紅葉のそれに遠く及ばない。

・美妙はディッケンズもサッカレーも鵜呑みにした批評をしたが、紅葉は難しくて少しもわからないと言った。字引をコツ／＼引いて油汗をダク／＼出して考え／＼読んで、成程コイツは巧エやではちつとも面白くないと言った。（魯庵）

紅葉はその自由で日本人の好みにあった訳筆で日本のナシヨナリズムの高揚した時期にも外国文学受容の上で大きな責を果たし、また、「トラヂデイ」に偏した日本の翻訳者達の中で、「コメヂイ」を評価した点も面白いと思う。

附論・日本におけるロシア語教育の問題と紅葉の位置

明治の中頃までよく使われた語学教育の分野での言葉に「正則」「変則」というものがある。『大言海』の「正則」の項には、「洋学教授につきて言う語。新しく、西洋人につきて、発音、文法、共に、正しき方法を以て学ぶこと。明治維新前の洋学に発音も不正確に、釈義も迂遠なりしを變則という。」とある。江戸の蘭学、儒学の伝統は根強く、変則乃ち訳読の技術は徳川時代に非常な発達をとげており、中国音とは無関係な漢文訓読体で漢文は日本人のものになっ

ていたが、明治維新後外国人教師が続々と入国してくるに伴って、訳読のみの語学からの転換が図られたのである。

「正則」の語学教育を代表したのが開成校の語学科と外務省の語学所を合わせて作られた東京外国語学校であった。外国人教員の数が当然多く、『東京外国語学校沿革』という本によると、明治六年の開設時、日本人の教員十七名に対し、外国人教員は十五人いた。教科は当該外国語の通用する国の初等ないし高等（ロシア語科ではロシアの中学校の教科書がテキストとして使用された。）のカリキュラムで行われ、日本人教員の授業も、また、語学教授だけでなく地理、歴史、数学などの一般教科に到るまで、外国語で行われた⁽³³⁾。日本国内に「留学」する「外地」を人工的に作り出していたに等しい。

二葉亭の入学した露語科もいったん二百五十人程の中から普通学科試験で四十人残し、三、四週間通学させてロシア語の発音の適否を試し、二十五名を残すというやり方で発足した。上級になると、ロシア人教師が文学書を教壇から次々朗読して聞かせ、生徒はこれを手ぶらで聞いているという授業が毎日続いたこと⁽³⁴⁾は、二葉亭にロシア語のリズムやイントネーションの美しさを教えた要因として有名であるが、維新後間もない日本の実験的な学校だったわけである。

しかし、程なく「予備門従来の学科課程の儀は専ら正則のみを主眼と致し・・何分解意の力少なく・・今後は入学試業に要する変則英学並びに数学を一層高尚になし・・」（加藤弘之の明治十四年文部卿宛）と政府の考えも変わり、「お雇い外国人」が大幅に減少し英学も訳読中心にもどっていった⁽³⁵⁾。

明治七年に英語科が独立して東京英語学校となり、これがやがて大学予備門となる。明治十八年にドイツ語科、フランス語科が大学予備門へと移され、残ったロシア語、中国語、韓国語（露清韓）の各科は東京商業学校に吸収された。これにより、東京大学予備門（のちの第一高等学校）から東京大学へという、当時の立身出世（すなわち官）への道がロシア語を学ぶ者には閉ざされたことになる⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾。

このとき二葉亭四迷は卒業までわずかな時日を残すのみであったにも関わらず、憤激して断然退学してしまう。

そうしてこの後、（文学翻訳にたずさわられるだけの豊かさをもつ⁽³⁸⁾）ロシア語を習得できる機関は、明治後期（三十二年）に外国語学校が再興されるまで⁽³⁹⁾なかったのである⁽⁴⁰⁾⁽⁴¹⁾。

この間のロシア語翻訳が途切れなかったのは正教神学校系の翻訳者達（小西増太郎、昇曙夢、瀬沼夏葉⁽⁴²⁾）と紅葉らの存在による。

ロシア文学に注目した紅葉は、文壇的には当然に無名であった彼らのロシア語力を借りてそれらのうちあるものを自分の主導と麗筆で日本の読者に知らしめた。

明治時代、雄勁且つ華麗な文語調は「文章」とよばれて読者の感受性の中に生きていた。其の時代、其の国の人のように原文を味わえると言うことと、日本人のために「文章」を書くことはそう簡単に両立するものではなかった。

二葉亭さえ左のように歎じていた。

原文を味わう力はあるがそれをリプロデュースする力が足りない⁽⁴³⁾

幕末から明治初年に引き継がれた草双紙類には複数の作者による執筆という事態の残存が見られたが、次第に個人の文学に移行する。しかるに独り紅葉周辺にのみ「合作」「共訳」「閲」「補」をうたった作品が多数生み出され、露文学翻訳の水準を保ったのである。其の時代的意義は大きい。

（かとう・ゆり 社会福祉学科）

注）

(1) 死の床にある師を慰めるために弟子が編んだ文集『換菓篇』に名を連ねた者の名を参考に挙げる。

鏡花泉鏡太郎、風葉小栗磯夫、秋声徳田末雄、白峯中山重孝、両泉新井幸太郎、苔花鈴木陽、吟葉篠山克己、嶺葉篠原璽瓏、西男田村栄造、水葉山里弦二郎、夏葉瀬沼郁子、麦人星野仙吉、春石北島英一、それに別格として後藤宙外。

(2) 当時から、「純粹の日本思想の代表作家」（北村透谷）、「洋装せる元禄文学」（国木田独步）という評価を受けてもいた。

(3) 「共同執筆作品をもって一巻が編まれるのは個人全集としては異例のことに属するが、むしろその点に・・そこには、固有の作者に所属し作者の内面を反映させたものとして読まれる近代小説とは別の次元で作品が生み出されていくありようをとらえることができるはずである。」（『紅葉全集』別巻 解題）

(4) 共訳、乙訳紅葉閲、紅葉訳、などの名義と実質的関与の度合いが相関的なものか、またどの程度相関的なものかは今後の課題である。

- (5) トルストイのものは、「アンナ・カレニナ」を始めとして、「少年時代」や「コサツクス」や「ホウコリニチカ」や「二時代」や、後には小西増太郎と紅葉との合作で「クロイツェル・ソナタ」が出た。その出た時には、流石に当時の人たちを驚かさずには置かなかった。
- 「えらいもんだな！」(田山花袋「近代の小説」)
- (6) 紅葉が一作一作実験的に書いていたことは、しばしば雑誌に初出の際付された「此の作品は涙を主眼とす」といった、作者の断り書き(「自序」)にも明らかである。
- (7) 句読点は、もともと、漢文を訓読する際、読みの上で息継ぎをおくべき箇所を示す必要があるときにおく補助符号であった。漢文は、中国音で読めば脚韻、対句の句法などによりおのずと切れ目は明らかである。これが教養ある中国人には句読点なしで読め、句読なしで書かれているわけである。一方日本人にとっては、正しく意味をとって読む、という行為と、「句切る」べきところがわかる、ということはおなじみであり、漢学者の大切な仕事の一つは、漢文に朱で句読点を打つことであった。句読点は、伝統的な(文化として共有されている)リズムを含んでいるという前提で書いたり読んだりされるという了解が成り立てば、必要とされなかった、従って殆ど打たれていなかった、とまとめられよう。俳句や和歌(定型詩)を考えてみるとよく判る。現代でさえ、それらに句読点がないことは問題とされない。
- (8) 句読点を要請する文体については拙稿「明治初期露西亜文学翻訳論攷(一)二葉亭の初期ツルゲーネフ翻訳」参照
- (9) 解禁とみるや報告書を持って本国露西亜に帰り、布教に必要な援助を要請した。この時の報告が「Упомяну с точки зрения христианской миссии (キリスト教宣教団の観点から見た日本)(中村健之介訳『ニコライの見た幕末日本』講談社学術文庫1979)」である。この書の中でニコライは、キリスト教を求め、其の信徒となるのは下級武士階級(儒教の訓練を受けている)であろうと正しく予見していた。
- (10) 明治四五年には三四一人の信徒と二七六の教会を数えた。
- (11) 明治十六年に母親が亡くなったときは、「耶蘇教」であったからと父祖代々の墓地への埋葬を拒否されたという。
- (12) 男子の正教神学校においては、日本語で「日本外史」「八大家文」「十八史略」「四書」「文章規範」「左伝」「数学」、ロシア語で「ロシア語学」「旧・新約聖書」「カテキズム」「正教会史」「万国地理」「万国歴史」「論理学」「物理学」「心理学」「哲学」「説教」。一方女子神学校ではロシア語は教科から省かれていた。
- (13) ジュール・ヴェルヌ「ミシエール・ストロゴフ」。表題の名の勇敢な若者が、シベリアで起こった土民達の反乱の中で活躍する冒險物語で、森田思軒によって明治二十年「盲目使者」の題で翻訳され、後解題されて版を重ねた。
- (14) 内田魯庵『罪と罰』明治二十五年前編刊行。
- (15) 二葉亭四迷『片恋』明治二十九年春陽堂。「片恋」「奇遇」「あひびき」の三作のツルゲーネフ作品を収録。
- (16) 魯庵は明治三十四年に丸善に入社し、書籍部門顧問および『学燈』(のち『学鏡』と改題)編集担当者となった。海外の新しい文芸を精力的に紹介して多方面の図書を輸入販売し、ブリタニカやセンチュリーの英語大辞典の月賦販売やステッキ、万年筆の販売に

も成功するなど、丸善に三十年以上勤めて同社の経営にも少なからず貢献した。

(17)「別紙胸算用校正入御覧候間御繁用中恐入候へども急々御寓目の上、誤訳の箇所御正しの上御廻送被下度願上候也」(九月十七日付瀬沼宛書簡)「此度は胸算用にて御厄介相掛け何とも恐縮の至に御座候」(同九月二十六日)

(18)『Ein Dummkopf』ITurgenjeff: Gedichte in Prosa. Deutsch von W.Lange. Leipzig, Verlag von Philipp Reclam jun. 1883 ドイツ語からの翻訳で鵑外は当時積極的に露西亜文学を翻訳紹介していた。アンドレーエフ「クサカ」については拙稿「明治初期露西文学 翻訳論攷(2)」(東大比較文学比較文化論集9)参照

(19)右の文は夏葉が訳した記事である。先にヴィソークフ本人から、ロシア語の新聞記事が紅葉に送られてきている。これを師のために訳したと見るべきだろう。(紅葉は「附記」として「対話中 往々錯誤あるは、案ずるに・・」と書いていて、一応目を通したことが解る。)

(20)父親が破産したため医科大学に学ぶ生活費を稼ぐ必要があった。

(21)「中国人が口から引き出してみせる白いリボン」のよう(雑誌に載った書評)に饒舌に書いたと言われている。

(22)チェーホフはこの初演五ヶ月後に亡くなっている。

(23)『硯友社と紅葉』改造社昭和二年

(24)松居は独学して逍遙の門に入り、『早稲田文学』の編集に携わったが、新聞記者を経て演劇界に入った。演劇視察のため欧米に渡り、帰国後は明治座によって留学で得た知識を傾けて新劇風の経営を行ったが旧勢力の猛反撃を受けて失敗した。精力絶倫の劇作

家兼演出家で、名作「茶を作る家」など百編を超える作品がある。

「洪水(La Inondation)」などゾラを数編、また「巨人岩(The Great Stone Face)」を明治二十二年に読売新聞紙上に発表しており、宮崎湖処子とともに我が国で最も古いホーソン紹介者である。(秋山勇造『翻訳の地平』より)

(25)明治39・1、博文館。筆者未見。『紅葉全集』別巻解題533ページに引用されているもの。

(26)『十千万堂日録』の明治三十六年六月一日の項に、「ノオトルダアム・ツ パリイ一卷(老円七十銭)を購入」したという記事が見られる。

(27)内田魯庵は「紅葉と最後の会見―世間に伝わらざる逸事」に、丸善の書籍部門顧問の魯庵がちょうど丸善に居合わせたとき、重体が新聞にも伝えられたやせ衰えた紅葉が自ら来た、みすみす余命幾ばくもないのが解っているのだから高価な外国の辞書を、買うでもあるまいと先延ばしをそれとなくすすめたが、「そこ(三月もすれば死んでしまうこと。注)は大悟徹底している。生延びようとは決して思わんが、欲しいと思うものは頭のハッキリしているうちに自分の物として一日でも長く見ておかないと執念が残る。・・」「じゃア君、頼むよ、一時間でも早く届くように」と紅葉が言い、死の直前まで向学心に燃えた紅葉の執念に打たれたことを書き残している。(車を駆りて丸善に向ひ、百二十円を払ひてセンチユリー大事典の購求を約す。八冊ハ同店に在れど附録二冊は来月頃の到着を待たざるべからずと。内田魯庵に遇ひて長談す。オスツロフスキーの戯曲ストオム一冊、クリスチイの俚諺金言集の二部を買ふ。『十千万堂日録』明治三十六年六月三十日)

また、徳富蘆花は、「尾崎君には友達がありませんね。ああい
う病気に罷つてもう前途も判っているものに、ユゴオのノオトル
ダムの訳文を見せるなんて。・・」と、憤然として薄田泣菫に
語ったといわれている。

(28) 二葉亭にもアンナ・カレーニナ翻訳の企図があった。しかし、夏
葉との競合を避けたと伝えられる。（西本翠隠。逍遙・魯庵編
『二葉亭四迷』「夏葉女史が翻訳中だと聞いてやめられた」）

(29) 『文藝』は星野麦人ら紅葉の門弟の俳句誌『俳藝』が文芸誌的に
発展改題したもの。

(30) 近代文学研究叢書15。306～307ページ

(31) 序文はケーベルが書いているが、木村浩氏（「瀬沼夏葉とケーベ
ル」チエーホフ月報、1987、筑摩書房）によれば、ケーベル
はロシア人であったが常々ロシア文学は好まないと語っていたそ
うである。

(32) 本稿は、明治初期、則ち筆者にとつては日露戦争前までの日本の
ロシア文学翻訳の背景を探ろうと言う意図によって筆を止めたも
のである。しかし、瀬沼夏葉、二葉亭四迷は、日露戦後亦日本の
情勢の変化の中で、極めて興味深い軌跡を辿った。特に女だたら
に家庭を留守に単身ペテルブルグに六カ月に及ぶ旅行をなした夏
葉については興味を尽きない。

(33) 内村鑑三は、「高貴なるもの、有用なるもの、向上的なるもの」
は英語によってよりよく表現できると述べている。

(34) ・・レールモントフ、ツルゲーネフ、ゴーゴリ、カラムジン、カ
ラゴゾフなどで、トルストイの『戦争と平和』など読みました。

（坪内・内田編『二葉亭四迷』中の太田黒重五郎の回想より）

(35) これは自明の展開ではあった。明治政府が莫大な給料を払って外
国人教師を招聘したのは、自国には西洋の学術を知る者も、まし
てそれを講義できる者もいなかったからであって、学問の水準が
あがれば、外国人を雇っておく必要もなければ、日本人が外国語
の習熟に、多大な時日と労力を費やすいわれもない。夏目漱石は

独立した国家という観点から考えると、かかる（注・英語によ
る）教育は一種の屈辱で、ちょうど、英国の属国インドといつた
ような感じが起こる。日本の nationality はだれがみても大切であ
る。英語の知識ぐらゐと交換のできるはずのものではない。した
がつて国家生存の基礎が堅固になるにつれて、以上のような教育
は自然勢いを失うべきが至当で、また事実として段々その地歩を
奪われたのである。実際、あらゆる学問を英語の教科書でやるの
は、日本では学問をした人がないからやむを得ない、ということ
に帰着する。」（『語学養成法』）

と述べている。

実際、漱石自身、英国留学から帰国するなりラフカディオハーン
の後任として東京帝国大学英語科の主任に任命され、ハーンは解雇
されたのである。

(36) 明治七年の時点で独及び仏語科には薩長出身者が可成りの数に昇
るのに、魯語科にはそれが皆無であった。（渡辺雅司前掲書）

(37) これは、福沢諭吉を含む日本の遣米遣欧使節団（この報告書は久
米邦武の名で『特命を
權大使米欧回覧実記』として纏められ、明治日本の
対外的な態度の基本方針を決める元になった）がパリの直後に露

都ペテルブルグを訪れた際の評価の相対的低さもなにか作用したと考えられる。

欧羅巴ニ於テ、最モ勢力アル国ハ、英、仏、日、墺、露ノ五帝
 国ヲ推ス、・其内ニ於テ最モ雄ナルヲ英仏トス、最モ不開ナ
 ルヲ露国トス、西洋人ハ、猶之ヲ土耳其ノ一等地ヲ出セシ国ト見
 做セルヲ免レス、露人モ亦英仏ノ顕国ニハ心ヲ屈セルヲ免レ
 ス、・露国ノ欧洲ニ於ル、其光景ハ此ノ如シ、東洋人ノ想像ハ、
 殆ト之ニ異ナリ、今ニ至ルマテ、日本人ノ露国ヲ畏憚スルコト、
 英仏ノ上ニ出ツ、・（『米欧回覧実記』第六十五卷 聖彼得堡
 府ノ記下）

そして、世界各地に送られていた幕末の留学生のうち、遣露留学
 生六名に対しては帰国勧告が出された。元来彼らは洋学者の子弟で
 あったが帰国後その多くは英学その他の他の洋学への転向を志望し
 たという。（この時以来ロシアという国名も、魯から露に表す漢字
 が変更された。「日が昇ると消える『露』』という含みである。）

(38) 二葉亭や、嵯峨のやなど、外語系のひとは創作にも筆を伸ばした。
 特に嵯峨の屋は、「薄命の鈴子」（カラムジン）「あわれなりーザ」
 「初恋」「あいびき」（ツルゲーネフ同名）といった、明らかにロ
 シア文学の影響下にあったことを示す題でもって創作した、興味
 深い例であろう。

(39) 第一回のロシア語科卒業が米川正夫、中村白葉など。かれらは
 『ロシア文学』という雑誌を創刊してロシア文学を精力的に翻訳
 紹介したほか、次々にロシア作家の個人全集を手がけ、日露戦後

のロシア文学ブームをリードした。

(40) 日露戦争までは軍隊が最も優れたロシア研究所であった。島田謹
 二『日露戦争前夜の秋山真之』『ロシアにおける広瀬武夫』（いず
 れも朝日新聞社）など。また石光真清『曠野の花』『望郷の歌』
 『誰のために』（いずれも中公文庫）

(41) 昇曙夢の息子昇隆一氏は復活後の外国語学校で学んだが、「父の
 固いペテルブルグ式発音をからかった」ことを回想される。

(42) 瀬沼夏葉氏はニコライ神学校教授瀬沼栞三郎の令夫人で、曾
 つて尾崎紅葉に師事したと聞いた。男子でさへも昇曙夢氏等一、
 二の人の他には知るものもなきロシア語を婦人の身にしてよく
 するのみか、文章も仲々巧みである。氏のチェホッフ短篇集は
 尤も夙く我国にチェホッフを紹介したものであらう。其軽くし
 て深いユーモラスな筆致をあれまでに写し得たのは成功したる
 翻訳と云はなければならぬ。氏が先年ロシアへ漫遊した時の
 記事を読めば、其観察もまた仲々緻密のやうである。若し創作
 に指を染めたらされも相応のところまでやれるであらうが、今
 日のやうな作家の当り年にあつては、却つて実のある翻訳家
 を嬉しいと思ふ。（生方敏郎「女流作家の群」『文章世界』第九
 巻第1号、大正三・一）

(43) 結局二葉亭の訳文のオリジナリテイの幾分かは、「日本文」つま
 り漢文（崩し）か和文（崩し）が自家のものでない、書けない、
 ということが手伝つていふと言ひ言ひ方も可能かも知れない。

その思想がいには急にロシヤ式に化せられたにも拘わらずそれ
 を言ひ現す文章としては漢文くづしか和文くづしか戯作しかなか

而も其三つともあんまり自由に使ひこなせないといふ苦しみであつた（「柿の蒂」）

二葉亭の書いた散文には、漢語と和語と外国語（書生用語）がない交ぜになっている。

座して、四顧して、そして耳を傾けていた。

という、「あひびき」訳文中の有名な一節の清新さは、また、二葉亭が和文（崩し）のリズムにも漢文（崩し）のリズムにも乗っていないことを証する。従来、ブシとモノノフとは言葉の位相が違った。漢文脈にもたれ掛かり対句や四字五字のまとまりのリズムで書かれた文の時はブシ、和文脈にもたれ掛かり掛詞や五七、七五のリズムに乗る文の時はモノノフと読んだ筈なのである。

二葉亭は「文章が書けない」と随筆中何度も言っていた。また、紅葉の文章に賛嘆措くあたわざるものがあつた。

補注*文体改革がもつとも劇的に行われたのは、十九世紀後半という、ロシアでは貴族時代の終わり（帝政末期）であり、日本では明治維新後すぐのことである。その時代は、やむを得ない文化的事情から、「正則」外国語教育がなされ、インテリは、母国語を介さないで先進文化をかの国の言葉で直接に受け入れるよう求められた。トルストイの「戦争と平和」が、冒頭の数ページに涉つてフランス語の会話で始まるのは象徴的である。露西亞の貴族は教育は勿論日常にもフランス語を用いており、ロシア語は読み書きはおろか

間違いなく話すのすらおぼつかない場合が珍しくなかった。そのようなインテリによって、語彙だけでなく、1) 例えば本来格変化によって語順が自由なロシア語が、主語、述語、目的語、という語順に大勢を占められる2) 例えば take have との複合動詞の使用が類なフランス語に準じて *быти, имѣти* といった、複合動詞が一語のロシア語動詞にとつてかわる、3) 例えば一般的でなかった受動態が多用される、といった、文法に至る強い影響をうけた。こうした現象をガリシズムという。二葉亭による文法改革は、日本におけるルシシズムといつてよいのかもしれない。

参考文献

立論上特に衣扱したものを掲げて謝意を表します。

1. 秋山勇三『翻訳の地平』翰林書房1995、
2. 中村喜和「瀬沼夏葉 その生涯と業績」一橋大学一橋学会編『人文科学研究』14、1972
3. 『紅葉全集』第十卷1994、岩波書店 解説（谷沢永一）
4. 『紅葉全集』第十一卷1995、岩波書店
5. 『紅葉全集』別巻1995、岩波書店
6. メーチニコフ著渡辺雅司訳『回想の明治維新』1987、岩波文庫

波文庫

7. 『チエホフ全集目録』
8. 尾崎知光『近代文章の黎明』国語国文学研究叢書18、桜楓社昭和四十二年
9. 田中彰校注『米欧回覧実記（四）』1980、岩波文庫（全五冊）

Translation of Russian Literature in Meiji (4)
Ozaki Kouyou and Russian Literature

Yuri Kato

The contribution of Ozaki Kouyou to translation of foreign literature (including Russian literature) has been neglected, for the translations have always appeared as cooperative ones with somebody else, who knew the language. But the author followed his cooperation with Senuma Kayou and concluded that, in fact, the works to translate and the style for each translation were decided on his own initiative. Thanks to Kouyou, the Japanese have been in touch with Russian literature, even when the education of Russian Language had not been constant in Meiji.

Key words: Ozaki Koyo, Senuma Kayo, translation, Russian literature, Chehov.